



Jeg liker Norge. —Norway 出張記—

日本原子力研究開発機構

椎名 良平

(ペンネームにて投稿)

1. はじめに

核データ部会員の方々に係わらず、国際会議やら研究会で海外出張をされる方は多いと思う。『振り返ってみれば、結構、いろいろな国を訪問したなあ』、と懐かしがる先輩方も多いと思う。国際会議等への参加登録をすると、『核データニュースへの寄稿依頼が来るのではないか』、との予想が頭をよぎる貴兄も多いと思う(笑)。海外出張される(された)方々が、核データニュース編集委員会より原稿記事を依頼されて、本号のように「会議のトピックス」として記事が紙面に飾られる。

ふっと思うに、会議トピックスの情報はもちろん大事だが、そこに行き着くまでの旅程の情報も別があれば、将来、同じ場所を訪問する方々に役立つのではなかろうか。そこで、Norway の Oslo 大学で開催された Workshop に参加した時の海外出張を、「読者の広場」の場所をお借りして、そこはかとなく書きつづりたいと思う。但し、出張(=仕事)なので風光明媚な場所や美術館などには行っておりませんし、また舌鼓を打つような食べ物の記載も出てきません(宇宙船やロボットが出てこない SF 小説みたいなものか)。その代わり、堅苦しい文面は一切ありませんから、ご安心召されよ。日々の研究の合間に、核データニュースの記事を多少なりとも楽しんでいただければ幸いです。えっ? お前が行って帰って来られたのだから何てことないだろう、ですって? まあそう言わずに、三里に灸をすえて、同行二人とまいりましょう。

2. 事の発端

記憶をたどってみると、Norway Oslo 大学にて、「3rd Workshop on Level Density and Gamma Strength」のワークショップが 2011 年 5 月 23~27 日の日程で開催され、上長が招待講演を受けて参加される予定であった。しかし、ご存知のとおり 2011 年 3 月 11 日に震災があり、実験装置の復旧作業のために上長は出張をすることができない状況になっ

た。しかし、渡航旅費が先方負担で、招待講演の話が進んできている。この時点でキャンセルするのも失礼である。そこで、代理として出張することになった。時に、開催1ヶ月前のことであった。事務手続き書類や Abstract 作成を前に、『はい、分りました』と出張を快諾した自分を呪った。『Norway って...?』



図1 Kingdom of Norway。

研究会を主催している Oslo 大学の Sunniva 博士やスタッフにメール連絡し、出張手続きのために Invitation の書類を頂いたり、Abstract を提出したりと、ここまでは普通である。問題は宿の手配であった。1ヶ月前だったので、もはや Workshop 事務局がおさえていたホテルは使えない。旅行代理店にお願いしつつ、自分で検索をしても、なかなか宿が見つからない。当の旅行代理店も空室がヒットしないのを不思議がり、日が迫ってくるにも係らず、なかなか手配できないために手数料を返却します、と言う始末。『プロのルートで手配できないのなら、諦めるしかないか』と思いつつ、先方のスタッフに宿の件を相談した。つまり、泣きついた訳です。先方も現地での利を生かして、いろいろ探して下さったが、市街の宿は一杯(!)で、少し市街から離れた Radiumhospiterate Hotel という病院に付随した宿泊施設を予約していただいた。どうも 5 月という開催時期が良

早速、ノルウェーについて調べてみると。“Norway”は、「北への道」という意味らしい。

人口：485 万人（大阪府の半分！）

全長：南北 1752 km

公用語：ノルウェー語（北ゲルマン語）

英語教育がしっかりしており、出張の際、お年寄りの方や、ガソリンスタンドの店員さんと話をしたが、普通に英語で会話ができます。

時差：-8 時間

日本からの直行便はなし。コペンハーゲン、ヘルシンキ、ロンドン、パリ、アムステルダム経由がある。

物価：非常に高い。

普通のバリューセットが 1,000 円もします。レート：2011.05.25 時で 1 NOK (Norway Krone) =17 円。ペットボトル 500cc の水が 18 NOK ぐらいなので、日本の 2 倍近い物価と覚悟すればいいでしょうか。

くなかったと思われる。Norway は 5 月 17 日が憲法記念日でお祭りムード、それに加えて季節が暖くなるこの時期に周辺国から旅行者がやってくるとのことである。そう言えば、滞在中も遠くから花火の音が聞こえていたっけ。この時期に Norway への出張がありましたら、早めの宿の手配をお勧めします。

3. いざ Norway へ

オスロ行きの直行便はないので、今回、成田国際空港、オランダのスキポール (Schiphol) 空港、そしてオスロ国際空港、正式名：ガーデモーエン (Gardermoen) 空港に降り立ち、そこからオスロ中央駅へ移動することとした。

25 May	TOKYO/NARITA	10 : 45	→	12 : 30
	AMSTERDAM/SCHIPHOL AIRPORT	15 : 20		
	KLM ROYAL DUCH AIRLINES KL862/L			
25 May	AMSTERDAM/SCHIPHOL AIRPORT	17 : 05	→	20 : 15
	OSL/GARDERMOEN AIRPORT	18 : 50		
	KLM ROYAL DUCH AIRLINES KL1149/L			

アイスランドのグリムスボトン火山が 5 月 21 日夕方に噴火したため、火山灰の拡散による欧州便の遅れが懸念され、そのとおりになった。受付カウンターで謝り続けているスタッフに、25 日中に行き着けば大丈夫と言って、変更されたチケットを受け取った。『20:15 にアムステルダムを経つとすると、オスロ空港に着くのは 22 時過ぎ、そこから電車での移動で 23 時頃にはオスロ中央駅か・・・』、とあさ黒い顔が青くなって瓜茄子のようになっていたかもしれない。北の異国の見知らぬ駅に深夜に一人降り立ち、旅行鞆をゴロゴロ鳴らしながらの移動、しかも傍から見れば日本人旅行者とすぐ分かる。『事件に巻き込まれないように、自分の人相の悪さが頼りだな』、と今回はあまり男前には生んでくれなかった親に感謝。楽天的な出張者を乗せて、オランダ航空便は定刻どおりに出発した。

旅の仕方も人それぞれのやり方があると思うが、私の場合、1 出張毎に 5 号サイズのノートを用意して、そこに現地の基本会話や通貨の情報はもちろんのこと、航空券、電車のチケット、レシートから飲料水のラベル、ホテルのコースターからキャンディの包み紙を、旅の流れに沿ってどんどん貼りこみ、書き込んでいっている。後々、ノートを開いてみると、異国の言葉で書かれたレシートや包み紙が、旅の思い出をペチャクチャ喋り出すから不思議だ。写真 1 は、そのノート一部である。KLM 航空機内で退屈しのぎに書き記したものである。接客しているキャビンアテンダさんを、チラチラ見ながらスケッチしている姿は、隣の客から変な親爺と思われたかもしれない。



写真1 海外旅行、いやもとい出張用ノート。

成田空港から11時間余りの苦行の末、アムステルダムスキポール空港に18:40頃、到着した。建物自体は非常に分かりやすい構造になっており、初めて降り立つ者でも、単純に目的のゲートまで歩けばよい。横のお店を見て、『あっ、球根が売られている！さすがアムステルダム。機内持ち込みはいいのだろうか？』などと立ち止まってはいけない。乗継のゲートに着くまでは気を許すな。着いて安堵の音を漏らせ。目的のゲートに到着してほっと一息。さすがに既に20時を回っているのに、日本の5月の午後4～5時のような明るさなのには違和感を覚える。乗客3名が搭乗に遅れたために、出発は20:55になった。上空から見る地平線（水平線か）に、沈まぬ太陽が美しかった（写真2参照）。夜が夜になることを拒むような、そんな不思議さ。『太陽が沈まぬうちに沈むことのないよう手を打っておくものだ』と言ったのは誰だったのだろうか。



写真2 オスロへ向かう機内より（22時過ぎ）。

22:30 頃、ガーデモーエン空港に到着した。その頃には、太陽はようやくその身を漆黒の中に収めていた。なんて言っている場合ではない。急げ！ガーデモーエン空港は、細長く造られており、ちょうどバイキング船をひっくり返したような構造で、歩きながらふと天井を見上げると、木材を基調とした滑らかな曲線を描く梁が、ああっ美しい（写真3）。だから急げって。



写真3 ガーデモーエン空港内（暗いのは深夜のせい）。

入国審査に向かう。2階の壁沿いに長々と造られている。『そう言えばオスロ国際空港って、ショーン・コネリー主演で旅客機がテロリストによってハイジャックされる映画の舞台だったよなあ』、と思い出しながら順番を待った。自分の番で、審査官に所属を尋ねられJAEAと答えると、Fukushimaのことを残念がっていたのが印象に残った。エスカレータを降りて、1階到着ロビーへ。セブンイレブンを手前に、左へ限りなく歩いていく。『コーヒー1杯 20 NOK か』寄り道はいけない。突き当りに“Flytoget”の目印旗があるので、すぐに目について分かりやすい。入口脇の窓口、ないし券売機にて切符を購入する。“Flytoget”（写真4）は、空港からオスロ中央駅を結ぶ Airport Express Train である。空港－中央駅間の 50 km ほどを約 20 分で結んでいる。たった 20 分の乗車に、料金 170 NOK は、少々割高だろう。20 分おきに便があるので非常に便利であること、フォローしておく。

23:16 に車両に乗り込んで、オスロ中央駅へ移動する。一人の黒人男性が礼儀正しく、『May I ?』と断ってきたので『Sure !』と答えると、私の隣の席に座った。深夜なので空席が目立つのに、わざわざ何故だろうと訝ったのだが、ほどなく自分が有色人種であることに気付かされた。特急は、天と地の境目が分からぬ程、黒く塗りつぶされた中を、静かに駆けていった。ポツン、ポツンと遠くに見える家の明かりで、そこが地上であることがかろうじて分かる。まるで夜空に浮かぶ星のように見えた。

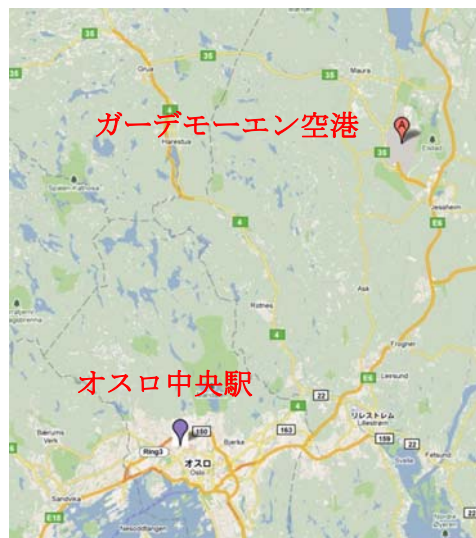


写真4 “Flytoget” 特急車両の写真（左）、空港から中央駅まで移動（右）

23:30 過ぎに、オスロ中央駅（Oslo Sentralstasjon）に到着した。あわただしく降りる乗客の中、見るからに添い遂げた老夫婦がゆっくりと旅行鞆を転がしながらコンコースを歩いていく。今までの旅行の思い出でも話しながら歩いているのだろうか。いや、呆けている場合ではない。急いで降りて、改札を抜ける。オスロ中央駅は、コンコースは3階にあり、駅の南北に通路が走っている。改札口は、見当たらなかった？ 北口方面は、オスロ市街で、地下鉄 Jernbanetorget 駅がある。南口方面は“Flytoget” 乗り場で、旧駅舎やショッピングセンターがある。南口から西口正面付近に出て、タクシー乗り場へ向かう。十数台のタクシーがある中、どれにするか迷う。『うわー運転席からこちらを睨んでいるよ』（筆者にはそう見えた）。“OSLO TAXI” の運転手さんが、人が良さそうだったので、宿泊先を告げると OK という返事なので乗車した。見知らぬ街を深夜に走る。土地勘のない者には、既にどこを走っているのかもはや分からない。分からなかったのは、運転手さんもだった（敵は車内にあり！）。Radiumhospiterate という病院の場所は分かるのだが、その Hotel までは分からなかったようである。近くをグルグル回って、Hotel と思いき建物に入って尋ねたり、最後には病院の通用口へ行って病院スタッフに聞いてくれた。何のことはない、病院の裏手に Hotel があったのだが、病院の建屋とくっ付いているので、それとは分からなかったのだった。『ここを斡旋されて一人で訪れるとなると、こりゃ必ず迷うな』、と思いながら、何はともあれ Hotel 前に着いた。料金は 300 NOK だった。サービス料は料金に含まれているので、チップの習慣はないのだが、一生懸命、場所を探してくれたので、50 NOK をチップとして渡した。それがいけなかった。ズボンのポケットにお札を押し込んでいたので、チップを出す時に、マネークリップごとそっくり 1,200 NOK 落としたようである。暗い車内だったので、気づかなかった。Hotel の部屋でズボンのポケットを探して、『ああっ、あの時か』と気づいた。高い授業料を払ったものとし

よう。運転手さん、あの夜乗った日本人は天使だったんだよ。どうか家族のために使えよ（泣）。

4. さあ鉄道で移動

出張なので Workshop の開催場所のオスロ大学へ移動しなければならない。オスロ市街周辺の地図を、図 2 に示してある。オスロは思った以上に小さい都市という印象を受けるだろう。中央駅から 10 km も行けば、もう山の風景が広がっている。

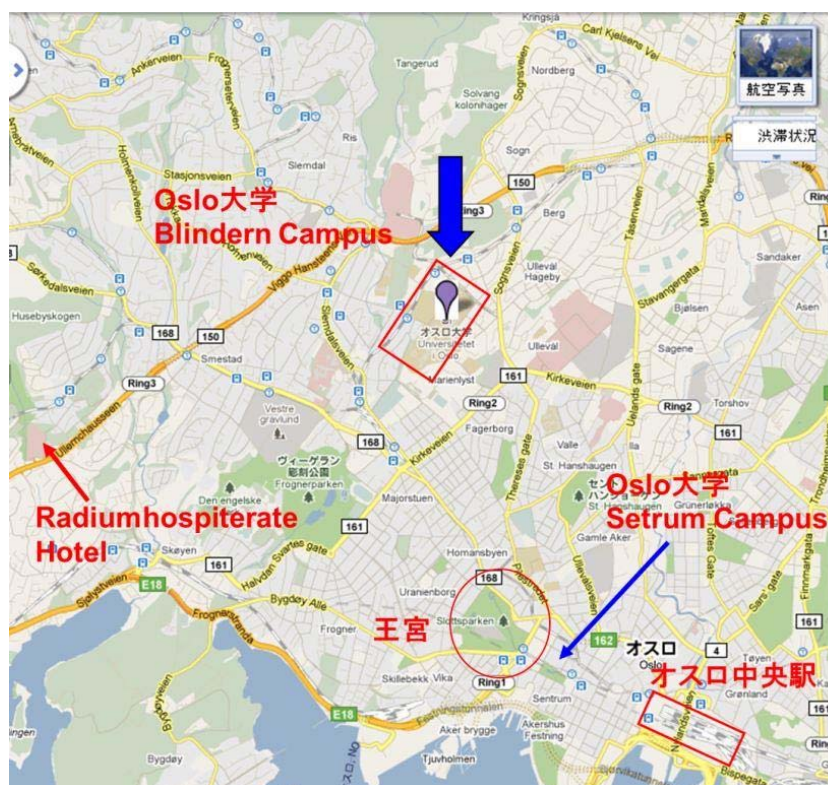


図 2 オスロ市街周辺の地図（中央駅、宿泊場所、そしてオスロ大学の位置）。

実際、私の宿泊先の Hotel も山の裾野に位置していて、遠くに市街地の夜景を眺めることができた。ここはオスロ大学まで鉄道を利用することにした。

都市が小さい分、鉄道の路線も単純で、非常に分かりやすい。オスロ中央駅北口にある地下鉄のヤーンバーネトーエット駅 (Jernbanetorget) を中心に、5本の路線が走っており、行き先がどの路線番号かを確認すれば良い。宿泊先の近くに Montebello 駅があることが分かり、しかも歩いて2~3分の距離だった。病院だから駅からのアクセスがいいんだな、と一人納得した。一旦、中央駅方面に向かい、マジェスチューエン (Majorstuen) 駅で乗り換えて、オスロ大学のある布林ダン (Blindern) 駅へと行くことにした。Majorstuen 駅の近くに、ウィーゲラン公園という広い公園があり、そこにはさまざまな彫刻がある。“怒りんぼう” という子供が痲癩を起こしている彫刻が特に人気だという。少

し話がそれた。さて鉄道に乗ろう。鉄道の乗り方は、

- ① まず、駅を探す（当然か）。①という看板が立っています。駅は無人駅で、改札などありません。自券機があるので、そこでチケットを買って、別に刻印機があるので、そこで自分で刻印してから、ホームに入ります。料金は 27 NOK で、2 時間以内なら自由に乗継が可能とのこと。『乗る時にチェック無しでいいのか？』、との疑問に輪をかけるように、とんと券を買っている人を見かけなかった。
- ② 次に、乗車する（当然か、乗る前に、降りる奴はいない）。路線番号と行き先を確認。今いる Montebello 駅は、路線#4 で市街地への上り方面。扉のボタンを押して、扉を開けて乗車する。『Please go ahead. After you.』と先に行かせた乗客の後に続く、『ふむふむ、あのボタンか』（ニヤリ）。
- ③ 最後に下車する（降りなきゃ、どこまで行くんだよ）。乗車と同じで、ボタンで扉を開けて降ります。改札口はなく、出口案内もない。Majorstuen 駅で、市街地へ向かう列車はここで地上走行から地下にもぐります。そのまま反対のホームに移動して、今度は路線#3 ないし#5 の下り方面で、Blindern 駅に向かいます。一度、①②③を経験すれば、こんなものかと、オスロでの移動は勝ったも同然です。

5. オスロ大学

Majorstuen 駅から Blindern 駅で降りて、右に曲がり緩やかな坂を 200 m ぐらい上がると、オスロ大学（Universitetet i Oslo: UIO）の Blindern Campus が見えてくる。1811 年、Royal Frederick University として設立され、1939 年に現在の大学名になった。3 万人の学生を有する、ノルウェー最大の大学である。ちなみに法学部のみ Setrum 地区、オスロ中央駅から王宮へ北西に伸びるメイン通りであるカールヨハン通り沿いにある（写真 5）。



写真 5 Oslo 大学、Setrum Campus。

オスロ大学布林ダンキャンパスの構内図を図3に示す。

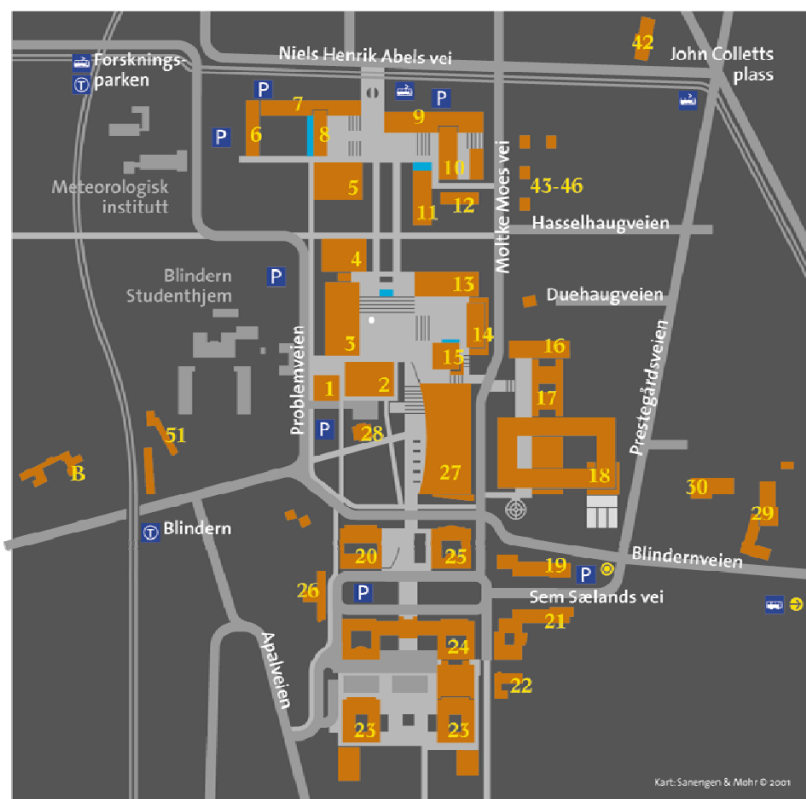


図3 オスロ大学布林ダンキャンパスの構内図。

左端の Blindern 駅 (ⓐの印) から歩いてきて、正面に#27 図書館が見えてくる。Workshopが行われたのは、#20 Helga Eng's Hus という建屋だった (写真6)。Helgaさんという女性の名前を冠しているようである。どういう方なのか調べてみるのも面白いと思う。その他の建屋も、学科名ではなく、人名を記していたのが多かったと記憶している。

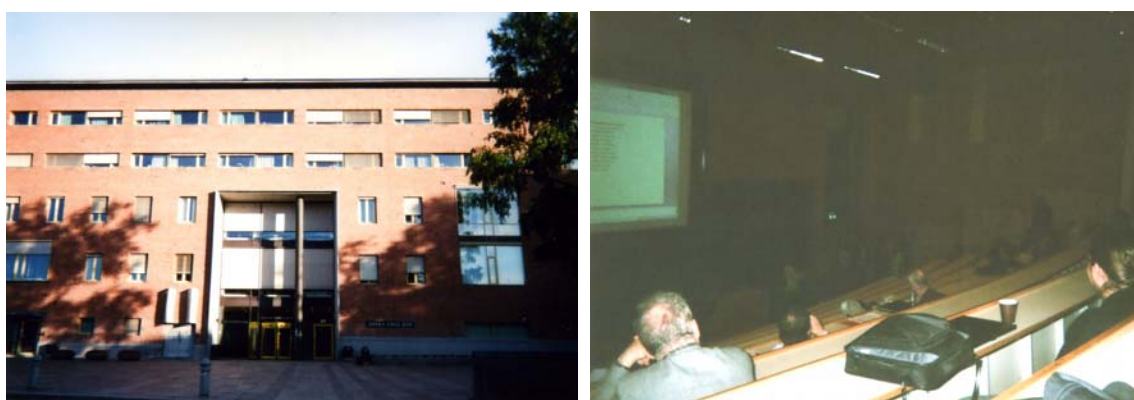


写真6 Helga Eng's Hus と Workshop での様子。

今回は出張記なので、会議内容については割愛させていただく。また、別の会議の参加機会があれば、寄稿したいと思う。

Workshop での発表も無事済んで閉会后、キャンパスを出て帰ろうとした時、ふと思い出した。『数学者アーベルは、オスロ大学出身じゃなかったっけ?』とって帰って構内図掲示板に戻って、建屋を調べる。確か、人名を冠した建屋が多かったはず。ノルウェーが生んだ偉大な数学者を、オスロ大学がないがしろにするはずがない。あった。“Niels Henrik Abel Hus” #10 の建屋だ (写真 7)。せき切って建屋に向かうが、それらしき記念碑など見当たらない。コンクリート壁に書かれた言葉の語感から、数学科らしいことは分かった。『そんな馬鹿な。どこかに何かしらあるはず』半ば残念に思いながら、写真 7 に見える壁の裏側へ周って見た。出会えた! (写真 8)



写真 7 Niels Henrik Abel Hus
(数学科の建屋のようです。)



写真 8 Niels Henrik Abel の像。

1824 年、「5 次以上の一般の方程式を解くことはできない」

アーベルの像は、数学科の建物と向かい合うように建立されていたのだ。日が傾きかけてきた光の中で、アーベルは懐片手に数学の思索にふけているのであろうか。台座には、彼の楕円関数に関する論文（？）に描かれた図が刻まれていた。それを見て、『あっ！』と気が付いて、財布の中の硬貨をあわただしく取り出した。いや、ぶちまけたと言っていいだろう。一つだけ、やけに擦り切れた硬貨が混じっていたのである。『これだ！』と取り出した1枚の20 NOK 硬貨が、**写真9**に示してある。



写真9 Abelの業績を記した硬貨。

擦り切れているが、20 KRの刻印の下、かろうじて文字が残っていた。若年性老眼に苦労しながら指でなぞり、確かにこう読める。

“NIELS HENRIK ABEL 1802-1829”

以上